れきみん
となん歴民だより vol.48

Morioka tonan history and folklore museum

平成28年9月30日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel/Fax 019-638-7228

企画展「『衣』からみる農家のくらし」 展示会場

是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

○雀神社　藤澤　栄耕

○企画展「『衣』からみる農家のくらし」終了報告

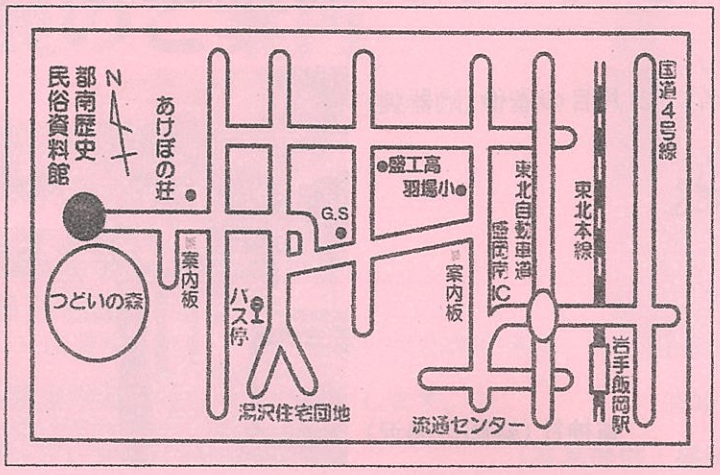
○次回企画展のご案内

○資料は語る㊱

○盛岡市所在指定・登録文化財紹介㊲

○となんの昔ばなし㊳

MAP☆ACCESS



○利用案内

開館時間
午前9時から
午後4時まで

入館料
無　料

休館日
月曜日
（休日に当たるときは、直近の平日）、
年末年始

近頃、当館には「湯沢の雀神社について知りたい」という来館者が増えています。雀神社については、昨年の当館企画展「都南の社寺と人々」でも紹介していました。そこで、今回は雀神社氏子総代であり、雀神社に伝わる民話と湯沢に残る関連史跡、神社に伝わる資料をもとに「雀神社物語(上)」を編集・発行した藤澤栄耕氏に御寄稿いただきました。
※藤澤氏は、当館の運営委員および当館が事務局を務める「となん・かけはしの会」の顧問です。

雀神社

雀神社氏子総代　藤澤　栄耕

昔、湯沢の地に温泉が湧き湯治場として賑わっていた頃の話である。

この湯治場に1人の巫女が住み、大変繁盛していた。巫女には1人の道楽息子がいたが、或る時に湯治客の間で財布の紛失騒ぎが起きた。いくら探しても出てこないため、遂には巫女の道楽息子に嫌疑がかかり、役人に引き渡され処刑されてしまった。巫女はこのことを悲しみ、ここに湯治場があったため起こったことだと言い、「湯沢の地から温泉をなくしてやる」と夜な夜な卵の殻に温泉の湯を運んでは山を越えた谷川のほとりに運んだ。

やがて、湯沢の湯は湧かなくなり、谷川のほとりに湯が湧いた。巫女の命が途絶えるとき、「湯沢の地と人を孫末代まで呪ってやる」と言い残し雀となって昇天した。その翌年から、農作物が出来る秋には雀の大群がやってきて穀物を食い荒らしていくようになった。捕らえてみてみれば、それは片目の雀だった。

困り果てていた村人たちは、通りかかった1人の旅の僧に助けを求めたところ、「それは巫女の祟りであろう。雀を祀りその霊を慰めよ」と助言された。村人たちは言われるままにお堂を建て巫女を祀ると、ぴたりと雀の被害は止まった。これが、雀神社にまつわる伝説の概略である。

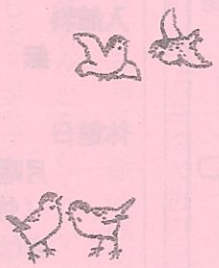
村人たちは、このお堂を巫女堂または雀堂と呼び習わしていた。明治の御代になって神社登録するとき所在地名を付して前林雀神社としたが、現在は単に雀神社と称している。

○伝説に関わる場所

1) 湯壷堤(温泉の湯元跡)　2)木村大明神碑跡(旅の僧木村某を大明神として祀った)　3)旧雀神社碑(巫女を祀ったお堂の跡地)　4)雀神社(大正11年[1922]に移転した現在の境内地)

○伝説に関わる資料

1)懸仏(巫女守護神記名)　2)片目の雀像(陶器製)



雀神社(盛岡市湯沢)

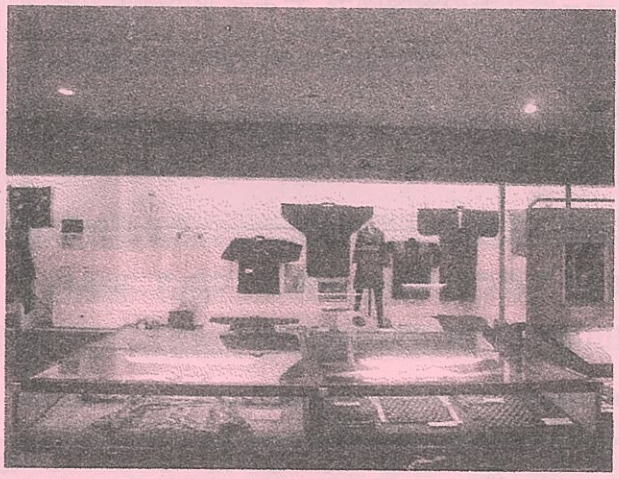
企画展「『衣』からみる農家のくらし」終了報告

当館では、平成28年7月30日(土)から9月19日(月・祝)まで企画展「『衣』からみる農家のくらし」を開催いたしました。当館では、新館2階常設展にて農家の日常着や作業着を展示していましたが、資料の情報が十分ではない状態でした。そのため、当館所蔵の衣服のうち聞き取り可能な資料について改めて聞き取り調査を行いました。残念ながら、聞き取りできた資料はわずかでしたが、特に多くの資料を寄贈いただいていた下湯沢老人クラブの皆様より聞き取りを行うことができました。

都南地域で身につけられていた‘こしぴり’や股引、手甲、もんぺ、雪合羽、角巻などを展示し、今では着られなくなった衣服から農家のくらしを紹介する展示でした。展示資料の一部は、当館新館2階常設展に展示しています。

本展で御協力いただきました地域の皆様には、この場を借りてお礼申し上げます。

寄贈者からの聞き取り再調査



展示会場

次回企画展のご案内

企画展　「都南の先人　宮崎求馬」

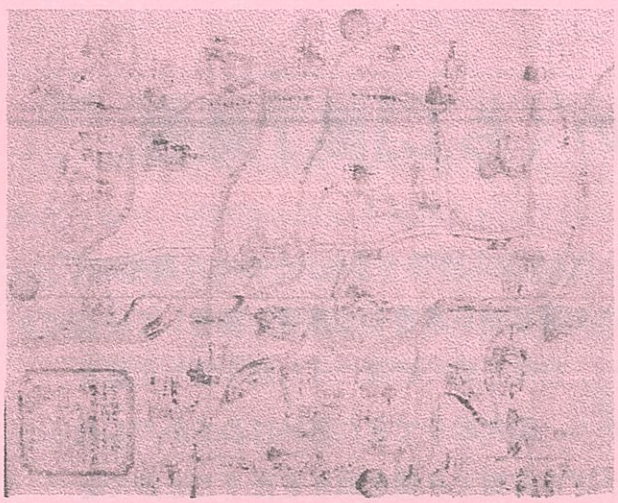
平成28年10月15日（土）～12月11日(日)

地域の教育に貢献し，私立図書館「宮崎文庫」を開いた都南の先人宮崎求馬について、現在調査中の資料を中心に紹介します。

宮崎　求馬

（写真提供：盛岡市立見前小学校）

資料は語る㊽



【和賀稗貫志和郡三十三番札所案内】

和賀・稗貫・紫波では「当国三十三番札所」と呼ばれ、花巻市太田に所在する音羽山清水寺を1番札所として33の札所がありました。この資料は、嘉永4年(1851)に1番札所の清水寺より発行された和賀稗貫志和郡三十三番札所の案内図で、右手が北の城下となっています。このうち、都南地域には9番札所飯岡寺、10番札所高寺、11番札所光西寺が描かれています。現在、高寺に安置されていた木造十一面観音立像(盛岡市指定有形文化財)は市内の大慈寺へ、光西寺の聖観音立像は手代森の大泉院へと移されており、9番札所は飯岡山麓の飯岡観音堂です。

盛岡市所在指定・登録文化財紹介㊾
盛岡市指定有形文化財

石造地蔵菩薩坐像(大智田中地蔵尊)　1体

盛岡藩5代藩主南部行信が、生母おしゅんの方の菩提を弔うため、その荼毘跡(現北山一丁目)へ元禄7年(1694)建立した坐像です。花崗岩で丸彫りされ、納衣は両肩を覆う通肩で左胸に環状の止め具をつけ、右手に錫杖、左手に宝珠を持ち結跏趺坐しています。

四ツ家町の有志が南部家43代南部利淳に願い出たことにより、現在地へと移りました。「四ツ家の地蔵さん」の愛称で親しまれています。参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』

『砂子姫の奮戦　三』となんの昔ばなし四十八

一方、飯岡側の軍では、岩倉常蔵が飯岡庄太郎の前へ進み出て「敵の斯波軍では、新たに遠野孫三郎が百騎の兵を率いて参加して参りました。どういたしましょう」と申し上げると、庄太郎は「敵が何騎で来ようと、城を枕とさだめて戦えば少しも恐ろしくはない。兵を励まし、戦うべし」と鼓舞しました。そこに、斯波軍の兵がなだれ込んできました。

この様子をみていた砂子姫は、再び戦の支度をして馬に乗り長刀を提げて大手の木戸を開き、「斯波の者共、先ほども我が腕前を恐れて逃げたのに、またもやってきたのか。討ち散らしてやるわ」と飛び出しました。長刀を風車のように振り回して敵陣へ向かい、あっという間に二十七騎を切り伏せました。そこに、遠野孫三郎の家来の綾織久之進という者が「やぁ、やぁ、砂子姫。我は久之進と申す。勝負しようぞ」と名乗りをあげました。「望むところよ」と、砂子姫と久之進の勝負が始まりましたが、力勝負では砂子姫に敵うはずもありません。久之進は首を討ち取られ、砂子姫は声高らかに名乗りをあげて館へ引き返そうとしました。すると、またも敵の杉崎大助が名乗りをあげ砂子姫に切りかかりましたが、砂子姫は大助の上帯を掴んで投げつけ首を討ち落としました。さらに、敵の福田民部も砂子姫に挑みますが、組み伏せられ首をとられてしまします。

砂子姫の強さは言葉に表しようがなく、少数では敵わないと思った斯波兵は大勢で挑むと、さすがの砂子姫でも敵わないので引き返そうとしました。そこに、小山田勘四郎という者が挑みかかりました。

出典：『となんの民話』(都南歴史民俗資料館、一九八八)